

感情体験の分析（Ⅲ）

—驚き・寂しい・愛しい・空しいについて—

上杉 喬・岡本 かおり・平宮 正志・吉川 延代

Analysis of Some Emotional Experiences (3rd report): On surprise, lonely, beloved and vacant

Takashi Uesugi, Kaori Okamoto, Masashi Hiramiya and Nobuyo Yoshikawa

はじめに

本研究は、感情体験についての一連の研究の第3報であり、本稿では、驚き、寂しい、空しい及び愛しいの4感情について、それらの感情を最も強く感じた体験の自由記述に基づいて、その感情の特徴を分析する。

第1報（上杉喬、榎場真知子、馬場史津 2002）においては、嫉妬、憎い、怒りの感情体験を分析した。その結果、嫉妬体験は、①好意・愛情に関する嫉妬、②能力に関する嫉妬、③モノに関する嫉妬の3種類があり、その嫉妬感情が生起する特徴は、A自分にとって大切なモノ（所有したい好意・愛情、所有したい能力、所有したい物）が、B自分ではなく、C身近な人にある（好意・愛情が向けられる、能力を持っている、物を所有している）という3者関係において、C身近な人に対して嫉妬感情が生じるというものであった。また、憎い及び怒り体験は、①他者からの行為、②自分の行為、③社会的事象の3種類があり、その憎い・怒り感情が生起する特徴は、A自分にとって大切なモノ（大切にしている人、大切にしている物、大切にしている心）が、B行為者（他者、自分、社会的事象の行為者）との2者関係において、B行為者によって、A大切なモノが「奪われる」または「壊される」場合に生じるというものであった。憎いと怒りは、類似した特徴を有するが、その違いは、憎いが自身の直接的被害と、また怒りがより間接的な被害と結びついている点にあった。

第2報（鈴木賢男、鈴木国威、上杉喬 2003）においては、喜び及び悲しいの感情体験を分析した。その結果、喜び及び悲しい体験は、①人の存在に係わるもの、②モノに係わるもの、③心（好意・愛情や充実）に係わるものの3種類があり、喜びの感情は、A自分にとって大切な人・モノ・心（大切にしている人、大切にしている物、大切にしている心）が、B自分自身との2者関係において、B自分自身がA大切な人・モノ・心を「得る」場合には喜びが、逆に、「失う」場合には悲しみが生じるというもので、その意味で喜びと悲しみは、それが生起する上で「得る⇔失う」の対極的な関係にあることを明らかにした。

本研究においても、驚き、寂しさ、愛しい、空しいの4感情が生起する特徴を検討するものである。

方 法

1. 調査質問紙

本研究で使用した質問紙は、『体験した感情』として、嫉妬、後悔、憎い、満足、屈辱、空しい、愛しい、不安、喜び、苦しい、驚き、恐れ、怒り、寂しい、充実、嫌悪、ためらい、恥ずかしい、悲しい、失望の20感情を挙げ、「あなたの今までの体験の中で、次の1から20のような感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して、それがどんな出来事だったのか、分かるように書いて下さい。また、その出来事がいつ頃（何才位）の事なのかも書いて下さい」と教示し、『その感情を体験した出来事』を30字程度のスペースに自由記述するものであった。

2. 調査対象・時期・手続き

B大学の「感情心理学」の授業において、1999年度（227名）、2000年度（190名）、2001年度（190名）の受講生、合計607名を対象に、授業初日に調査用紙を配付し、翌週の授業に提出という手続きをとった。調査は記名式であった。

3. 感情体験時の年令

一つの出来事に対して1つの年令が記されていたのは、「驚き」は535名（88.1%）、「寂しい」は480名（79.1%）、「愛しい」は472名（77.8%）、「空しい」では475名（78.3%）であった。上記以外は、複数の年令または年令に幅（期間）のある記述であったが、これらについては複数の年令の場合には感情を強く抱いた初めての年令（5才,15才→5才）とすることにし、年令に幅のある記述については中央値（高校時代→16才）とし年令を換算した。

研究1 驚きについて（分担執筆 上杉 喬）

1. 驚き体験の分類

調査対象者606名のうち、驚き体験を具体的に記述した者は578名（95.4%）、記述しなかった者は28名（4.6%）で、この28名中5名は「あまりない」「これといってない」とするもので、23名がブランク（無記入）であった。

驚き体験は、「驚きの対象（誰に、また何に驚いたか）」と「驚きの状況（どうした場合、状況で驚いたか）」によって分類することとした。

1-1 驚きの対象（誰に、また何に驚いたか）による分類

驚き体験の578名の記述から「驚きの対象（誰に、また何に驚いたか）」について分類したところ、次の45のカテゴリー（1～45）に区分することができ、45の内容はさらに5つ（I.～V.）にまとめることができた。（注）体験時の年令を（ ）内に示す。

I. 大切なものを得ることに関するもの

1) 大学・高校・中学への合格や資格・免許の合格：例えば、「中学入試の繰り上がり合格（12

- 才)」「受からないといわれた高校に受かったとき (15才)」「大学の合格発表をもらったとき (18才)」「珠算三級に合格したとき (12才)」
- 2) 思いがけない所での友人との出会いや著名人を見かけたこと：「駅で昔の友達に会ったとき (19)」「越谷にいないはずの人に越谷で会った (20)」「東京で芸能人を見たこと (15)」など
 - 3) 好きな人からの愛の告白や思いもよらない愛の告白：「好きな人から告白されたとき (14)」「突然、告白されたとき (18)」「塾のチューターから告白されたとき (17)」など
 - 4) 入賞や受賞、代表や主役に選ばれた：「習字で文部大臣賞をとれたとき (14)」「弁論大会で入賞したとき (14)」「自分が答辞に選ばれたこと (18)」など
 - 5) 友人・家族の好意・愛情：「友達に自分の考えを否定されると思ったらかばってくれた (17)」「私のために泣く友達がいた (20)」「親が私の知らないところで私を心配しているのに気付く (18)」など
 - 6) 突然の・おもいがけないプレゼント：「20才の誕生日に思いがけないプレゼントをもらったから (20)」「ブランドのバックをいきなり親が買ってくれたとき (19)」「初めて犬を貰った時 (5)」など
 - 7) できないと思っていたことができた：「初めて逆上がりができた時 (8)」「チャリで熊谷まで行ったとき (19)」「自分の限界がここまでと思っていた事が、やってみたら限界と思っていたことができたとき (19)」など
 - 8) 誕生パーティや誕生祝：「誕生日の日、内緒でパーティを企画してくれたとき (19)」「20才の誕生日に多くの人が祝ってくれたこと (20)」など
 - 9) 自然のすばらしさにふれた：「初めて登山に行った時、山を見て (5)」「天の川を初めて見たとき (17)」「地球を宇宙からの映像で見たとき (10)」など
 - 10) 宝くじや懸賞に当選：「親戚の人が宝くじで3000万円当たったとき (15)」「宇多田ヒカルのライブのチケットが当選したこと (19)」「懸賞に当たったとき (19)」など
 - 11) 自然や宇宙の神秘を知った：「朝顔の発芽 (6)」「宇宙の神秘を知ったとき (例えば、ビッグバンとか) (10)」
- Ⅱ. 大切なものを失うことに関するもの
- 12) 親類や友人などの死：「朝起きてみたら、ひいおじいちゃんが亡くなっていたとき (9)」「自分の友達が突然死んでしまったとき (12)」「好きなミュージシャンが死んだことを知って (18)」「いとこが自殺したと聞いたとき (20)」「友人が自殺未遂をした (20)」など
 - 13) 親族や友人などの病気：「母が突然入院したとき (17)」「父が癌を宣告されたとき (18)」「昔の友人が、すごく体調を崩していて、その話を聞いたとき (19)」など
 - 14) 好きな人が他の人と付き合っている (三角関係)：「先輩が夏休みの間に同じサークルの彼女をつくっていたこと (19)」「自分が好きな人と友達が付き合っていることを知ったとき (16)」など
 - 15) 気がついたら間に合わない時刻：「大会で起きたら集合時間だったとき (19)」「初めてのバイトでPM6時からなのに起きたのがPM5時55分だったとき (18)」
 - 16) 人に怪我させた (大失敗)：「弟に怪我をさせたとき (11)」「屋上でバスケットをやっていた時、道路にボールが落ちた」
 - 17) 受験不合格：「現役 (高三) の時、全部、大学に落ちたこと (18)」

Ⅲ. 思いもよらない事実・出来事・考え方に関するもの

- 18) 自分、家族、友人に関する意外な事実：「偶然知り合った子が、後輩の従兄弟だったこと (15)」「友達の意外な一面を見たとき (10)」「祖父が血のつながりが無いと知った時 (再婚なので) (7)」「父親に離婚歴が3回あり、しかも異母兄弟が数人いると知ったとき (16)」「自分の家系が癌家系だったこと (19)」など
- 19) 自分と違う他人の行為や考え方：「友人に異性についての話を聞いて考え方が全く違ったとき (18)」「自分が他の人とは違うと気付いた (4)」「アメリカに行き、ホストファミリーとの話し、考え方の違いに (16)」など
- 20) 意外な出来事：「いきなり空に鳥の大群が押し寄せてきたとき (9)」「アパートに家出少女が来たとき (19)」「妹が停学になったとき (19)」など
- 21) 思いもよらない付き合い：「友人が意外な人と付き合っていると聞いたとき (19)」「友人がいつの間にか彼女ができていたとき (16)」「友達が異性とつき合いだした (13)」など
- 22) 演奏・プレーなどのレベルの高さ：「試合を観ていて、そのレベルの高さに驚いた (16)」「千住真理子がツイゴイネルワイゼンを弾いているのを見て、その超絶技に驚いた (20)」など
- 23) 自分自身の新たな面：「ステージで全く緊張しない自分に (19)」「自分の中の醜い感情に気づいたとき (14)」など
- 24) 家族・友人の思いもよらない行為：「父親が子どものように1人で怒っていた (19)」「家の外へ出たら、祖父がタヌキをさばいていた時 (9)」「友人の夜逃げ (19)」など
- 25) 桁外れの出来事：「友達と夜12時から朝7時30分まで、7時間半連続電話したこと (20)」
- 26) 超常現象や神秘体験：「TVでUFO番組を見たとき (19)」「金縛りにあった時 (17)」「夜中に猫に『オイ』と言われたとき (19)」
- 27) 親しい人の犯罪行為：「高校の先生が捕まったとき (事件を起こした) (18)」「友人がドラッグをやっていることを聞いた (20)」「友達が万引きをしていることを知ったとき (17)」
- 28) 全く同じ出来事：「家族全員が同じ所にほくらがあることを知ったときのこと (7)」「コンサートにいてCDと同じだったとき (15)」など
- 29) 親・友人の不倫・浮気：「父が浮気をしているのを知ったこと (16)」「バイト先で上司とバイト仲間が不倫してたこと (19)」など
- 30) 世の中の複雑さ：「世の中の複雑さを実感したとき (20)」など

Ⅳ. 思いもよらない大きな変化

- 31) 親しい人や著名人の結婚や妊娠・出産：「先輩が突然結婚することになったとき (20)」「結婚できるのだろうか？と思っていた兄が突然結婚すると言ったこと (19)」「いじめられていた子が結婚して子供もいると分かったとき (18)」「幼なじみの男の子が来年の3月にパパになるということを知ったとき (19)」「我聞に子供がいたこと (19)」など
- 32) 身体や精神の大きな変化：「成長期に1ヶ月2cm身長が伸びた (13)」「17kgやせた自分とやる前の写真を見比べたとき (19)」「子ども嫌いだったのに、可愛く思えて来た時 (21)」「成人式で再開した友人の変わりよう (20)」など
- 33) 親しい人が会社・学校・バイト・部活などを辞めた：「いつのまにか父が会社を辞めていた (14)」「まじめだった友達が、上司と問題を起こし会社を辞めてしまったこと (20)」「彼女、彼氏ともに仲の良かったカップルが別れたと聞いたとき (19)」など

34) 突然の物音や静寂：「テレビを見ていたら停電になったこと (9)」「夜の静かなときに突然すごい物音がしたとき (18)」など

V. 身の危険を感じる出来事

35) 交通事故や怪我：「車にはねられた瞬間 (5)」「海に行って波に巻き込まれたとき (5)」「頭の上に時計が落ちて来た時 (15)」「車にひかれそうになったとき (16)」など

36) テロや通り魔事件など：「貿易センタービルがテロリズムにあった (20)」「池袋で通り魔が出たとニュースで聞いた時 (20)」「ケンカに巻き込まれ、流血したとき (13)」など

37) ゴキブリやヘビなど：「ゴキブリが上から降って来たとき (16)」「自分に向かってゴキブリが飛んで来た (19)」「目の前に蛇がいた (アオダイショウ) (17)」など

38) 脅かされる：「肝試しで脅かされた時 (6)」「何もしていないのに、知らない人に怒鳴られた時 (14)」「中1のときに、数学の授業中にこっそりと友達に手紙 (メモ) を渡したら、それが先生に見つかって、手紙を取り上げられたこと。心臓が飛び出る1歩手前だった (12)」

39) 怖い出来事：「お化け屋敷にいった時 (6)」「初めてジェットコースターに乗った時 (8)」「気球から落ちる夢をみたとき (10)」など

40) 人や動物の急な飛び出し：「バイクに乗っていた時、急に猫が飛び出して来た時 (20)」「バイトの帰りに真っ暗な物陰から急に人がでて来た (18)」など

41) 襲われる：「自分の苦手な犬が飛びかかって来たとき (19)」「学校に行く途中、自転車に乗っているのに、相手も自転車の痴漢に遭って触られた (15)」など

42) 隣家が火事：「高校の頃、隣の家が火事になって、すぐ近くまで火がまわってきたとき (17)」など

43) 飼い犬の残酷な行為：「冬、雪の中、鳥が飛べなくなって助けようとしたら、家の犬が飛びかかって殺してしまったとき (18)」など

44) 大震災：「阪神大震災 (16)」など

(注) 以上の44の内容 (小分類) いずれにも該当しないもの7記述を45) その他としたが、「何に驚いたのか」が不明な記述なので省略した。

1-2 驚きの状況

驚き体験の記述から「どういう場合、状況で驚いたか」について分類したところ、578名の記述内容は、全て、次の6分類のいずれかに属するものであった。

1) 予想外の (予想しなかった、予想以上の) 出来事

例えば、「絶対に受からないと思っていた試験に受かったとき (17)」「友達だと思っていた人から告白されたこと (12)」「伊丹十三が自殺してしまったこと (19)」「相手が予想していた人とは違って、素直で優しくかったこと (19)」「いじめられていた子が結婚して子供もいると分かったとき (18)」「体重が10kg近く増えていたとき (18)」「友人が、私の家の前で交通事故を起こしたこと (10)」など

2) 想像外の (思いもよらない、想像することもできない) 出来事

「思いもよらない人から告白されたとき (19)」「電話で親友から私の恋人と付き合いたいと聞かされたとき。すぐには口をきけなかった (20)」「エンパイア・ステイトビルに飛行機が突っ込んだ時 (22)」など

3) 偶然 (たまたま) の出来事

「大学内で幼なじみに偶然会った (20)」「町で偶然有名人を見つけたとき (18)」など

4) 突然 (急に出現する) 出来事

「自分が好意を寄せていた人から、突然告白された (19)」「突然プレゼントを渡された (18)」「皆がいきなり誕生日パーティをやってくれたとき (20)」「一緒に住んでいたおじいちゃんが突然亡くなったとき (16)」「高校時代、友人が突然学校を辞めたとき (17)」「自転車のブレーキが切れたとき (19)」など

5) 初めて体験する出来事

「野球の試合で初めて勝ったとき (14)」「はじめて海外へ行った時、見るもの全てに対して (20)」「サーカスをはじめて見に行ったとき (5)」など

6) 希な (めったにない) 出来事

「5000 人の中の 1 人に選ばれた時 (19)」「自分が模試で偏差値 70 を取ったとき (20)」「一目はれしたとき、世の中にこんな顔があるんだと驚いた (24)」「電車の中で、腕の毛がものすごく長い人を見たとき (16)」など

1-3 驚き体験の感情価

一般に、感情体験は、快感情 v.s. 不快感情を軸とする固有の感情価 (プラス感情 v.s. マイナス感情、またはポジティブ感情 v.s. ネガティブ感情) を示す。喜び体験は、その感情価の強さにちがいはあっても、プラス (ポジティブ) の内容を示し、悲しみ体験は、マイナス (ネガティブ) な内容を示す。

これに対し、驚き体験の場合には、

- 1) 感情価としてプラス (ポジティブ) 感情を示す事象
 - 2) 感情価としてマイナス (ネガティブ) 感情を示す事象
 - 3) 感情価として中性 (中間) 感情を示す事象
- のあることが示された。

結 果

1. 驚き体験の「対象 (誰に、また何に)」の分布

表 1-1. に、「驚きの対象 (誰に、また何に驚いたか)」によって分類した 5 つの分類と 45 のカテゴリーの年齢区分別分布を示す。

- 1) 驚き体験 5 つの大分類毎の出現頻度は、『Ⅰ. 大切なものを得ることに対する驚き』が 196 名 (33.4%)、『Ⅱ. 大切なものを失うことに対する驚き』が 70 名 (12.1%)、『Ⅲ. 思いもよらない事実や出来事や考え方に対する驚き』が 128 名 (22.1%)、『Ⅳ. 思いもよらない大きな変化に対する驚き』が 80 名 (13.8%)、『Ⅴ. 身の危険を感じる出来事に対する驚き』が 97 名 (16.8%)、『その他』(7 名、1.2%) であった。
- 2) 『Ⅰ. 大切なものを得ることに対する驚き』では、出現頻度 10 名 (1.7%) 以上について見ると、1 位は「大学・高校・中学への合格や資格・免許の合格」(60 名、10.4%) で、2 位は「思いがけない所での友人との出会いや著名人を見かけたこと」(27 名、4.7%)、3 位は「好きな人からの愛の告白や思いもよらない愛の告白」(25 名、4.3%)、4 位は「できないと思っていたことができた (成功)」(22 名、3.8%)、5 位は「入賞や受賞、代表や主役に選ばれた」

表1-1 驚き体験の対象別分布と年齢区分別分布

		内 容	度数	%	年齢区分							
					4～5	6～8	9～11	12～14	15～17	18～20	21～24	
Ⅰ. 大切なものを得る	1	大学・高校・中学への合格や資格・免許の合格	60	10.4				2	20	38		
	2	思いがけない所での友人との出会いや著名人を見かけたこと	27	4.7					5	19	3	
	3	好きな人からの愛の告白や思いもよらない愛の告白	25	4.3				4	9	12		
	4	できないと思っていたことができた（成功）	22	3.8		1		3	5	13		
	5	入賞や受賞、代表や主役に選ばれた	17	2.9		2	1	5	5	4		
	6	友人・家族の好意・愛情	11	1.9					1	9	1	
	7	突然の・おもいがけないプレゼント	10	1.7	1	2		1	1	5		
	8	誕生パーティや誕生祝	8	1.4					2	6		
	9	自然のすばらしさにふれた	7	1.2	1		2		2	1	1	
	10	宝くじや懸賞に当選	7	1.2		1			2	4		
	11	自然や宇宙の神秘を知った	2	0.3		1	1					
		（小計）	196	33.9	2	7	4	15	52	111	5	
Ⅱ. 大切なものを失う	12	親族や友人などの死	37	6.4	1	1	4	4	8	18	1	
	13	親族や友人などの病気	18	3.1		1		4	5	8		
	14	好きな人が他の人と付き合っている（三角関係）	9	1.6					2	5	2	
	15	気がついたら間に合わない時刻	3	0.5						3		
	16	人に怪我させた（大失敗）	2	0.3			1		1			
	17	受験不合格	1	0.2						1		
		（小計）	70	12.1	1	2	5	8	16	35	3	
Ⅲ. 思いもよらない事実や出来事や考え方	18	自分、家族、友人に関する意外な事実	28	4.8		3	4	2	6	13		
	19	自分と違う他人の行為や考え方	20	3.5	1		1		4	12	2	
	20	意外な出来事	16	2.8	1	1	3		2	9		
	21	思いもよらない付き合い	12	2.1				1	1	9	1	
	22	演奏・プレーなどのレベルの高さ	9	1.6	1				3	4	1	
	23	自分自身の新たな面	9	1.6				2	2	5		
	24	家族・友人の思いもよらない行為	6	1.0			2		1	3		
	25	桁外れの出来事	6	1.0					2	3	1	
	26	超常現象や神秘体験	6	1.0			2		2	2		
	27	親しい人の犯罪行為	6	1.0					2	4		
	28	全く同じ出来事	4	0.7		1		1	1	1		
	29	親・友人の不倫・浮気	4	0.7					1	3		
	30	世の中の複雑さ	2	0.3						2		
		（小計）	128	22.1	3	5	12	6	27	70	5	
Ⅳ. 思いもよらない大きな変化	31	親しい人や著名人の結婚や妊娠・出産	33	5.7				1	4	27	1	
	32	身体や精神の大きな変化	29	5.0		1		4	3	18	3	
	33	親しい人が会社・学校・バイト・部活などを辞めた	14	2.4		1		1	5	7		
	34	突然の物音や静寂	4	0.7			1			2	1	
		（小計）	80	13.8		2	1	6	12	54	5	
Ⅴ. 身の危険を感じる出来事	35	交通事故や怪我	36	6.2	5	3	3	3	10	11	1	
	36	テロや通り魔事件など	13	2.2				2	2	8	1	
	37	ゴキブリやヘビなど	12	2.1				2	2	8		
	38	脅かされる	8	1.4	1	2	1	2	1	1		
	39	怖い出来事	8	1.4	3	3	2					
	40	人や動物の急な飛び出し	7	1.2					1	5	1	
	41	襲われる	5	0.9			1		3	1		
	42	隣家が火事	3	0.5				1	1	1		
	43	飼い犬の残酷な行為	3	0.5	1					2		
	44	大震災	2	0.3					1	1		
		（小計）	97	16.8	10	8	7	10	21	38	3	
	45	その他	7	1.2			1	1	2	3		
		合 計	578	100.0	16	24	30	46	130	311	21	

(17名、2.9%)であった。

- 3)『Ⅱ. 大切なものを失うことに対する驚き』では、1位は「親族や友人などの死」の37名(6.4%)、2位は「親族や友人などの病気」の18名(3.1%)であった。
- 4)『Ⅲ. 思いもよらない事実や出来事や考え方』では、1位は「自分、家族、友人に関する意外な事実」(28名、4.8%)、2位「自分と違う他人の行為や考え方」(20名、3.5%)、3位「意外な出来事」(16名、2.8%)、4位「思いもよらない付き合い」(12名、2.1%)であった。
- 5)『Ⅳ. 思いもよらない大きな変化』では、1位は「親しい人や著名人の結婚や妊娠・出産」(33名、5.7%)、2位「身体や精神の大きな変化」(29名、5.0%)、3位「親しい人が会社、学校、バイト、部活などを辞めた」(14名、2.4%)であった。
- 6)『Ⅴ. 身の危険を感じる出来事』では、1位「交通事故や怪我」(36名、6.2%)、2位「テロや通り魔事件など」(13名、2.2%)、3位「ゴキブリやヘビなど」(12名、2.1%)であった。

2. 驚き体験の「状況」

表1-2の右欄(最下段)は、驚きがどういう場合にまたどういう状況で体験されたのか、その出現頻度を示すものである。

「予想外(予想しなかった、予想以上の)出来事」に分類されたものが最大で、281名(48.6%)、予想外よりもより予想外レベルの高い「想像外(思いもよらない、想像することのできない)出来事」が72名(12.5%)、さらに予想していないという点では予想外ではあるが、「偶然(たまたま)の出来事」ととらえているものが8名(1.4%)あった。これらは、いずれも大きく「予想外」に含まれると考えられるので、合わせると「予想外」の出現頻度は、361名(62.5%)となった。

また、予想がつかないという意味では、予想外とも言えるが、体験の仕方として、「突然の(急に出現する)出来事」が150名(26.0%)、「初めて体験する出来事」が14名(2.4%)で、その出来事が「希な(めったにない)出来事」として驚きの対象となったと考えられるものが、53名(9.2%)であった。

3. 驚き体験の感情価

表1-2の左欄(最下段)は、驚き体験の具体的内容が感情価として、プラスv.s.マイナス及び中性(プラスともマイナスとも言えない)のいずれに属するかの頻度を示したものである。578名の記述内容は、「感情価としてプラス(ポジティブ)感情を示す事象」の記述が268名(46.4%)、「感情価としてマイナス(ネガティブ)感情を示す事象」が208名(36.0%)、「感情価として中性(中間)感情を示す事象」が102名(17.6%)に分布するものであった。

4. 驚き体験の「対象」と「状況」

表1-2の右欄は驚き体験の「対象」と「状況」のクロス表である。5分類毎に「状況」の構成%を見ると、『Ⅰ. 大切なものを得ることに対する驚き』では、いわゆる「予想外(予想外・想像外・偶然)」が67.3%、「希な」が14.3%、「突然」が13.8%を示し、『Ⅱ. 大切なものを失うことに対する驚き』では、いわゆる「予想外」が64.3%、「突然」が45.7%、『Ⅲ. 思いもよらない事実や出来事や考え方』では、いわゆる「予想外」が77.3%、「希な」が16.5%、『Ⅳ. 思いもよらない大きな変化』では、いわゆる「予想外」が70.0%、「突然」が30.0%。また、『Ⅴ. 身の危険を感じる出来事』では、いわゆる「予想外」が32.0%、「突然」が61.9%を示した。

5. 驚き体験の「対象」と「感情価」

表1-2の左欄は、驚き体験の「対象」と「感情価」のクロス表である。5分類毎に、「感情価」

表1-2 対象と感情価及び対象と状況のクロス表

		対 象	感 情 価				状 況						
			肯定	中性	否定	合計	希な	初めて	突然	偶然	想像外	予想外	合計
Ⅰ. 大切なものを得る	1	大学・高校・中学への合格や資格・免許の合格	60			60			1			59	60
	2	思いがけない所での友人との出会いや著名人を見かけたこと	26	1		27	3		7	8		9	27
	3	好きな人からの愛の告白や思いもよらない愛の告白	25			25			9		3	13	25
	4	入賞や受賞、代表や主役に選ばれた	15	2		17	11		1		2	3	17
	5	友人・家族の好意・愛情	11			11						11	11
	6	突然の・おもいがけないプレゼント	10			10		1	4			5	10
	7	できないと思っていたことができた(成功)	22			22	9	3				10	22
	8	誕生パーティや誕生祝	8			8			5			3	8
	9	自然のすばらしさにふれた	7			7		5				2	7
	10	宝くじや懸賞に当選	7			7	5					2	7
	11	自然や宇宙の神秘を知った	2			2					2		2
			193	3		196	28	9	27	8	7	117	196
			98.5	1.5			14.3	4.6	13.8	4.1	3.6	59.7	100.0
Ⅱ. 大切なものを失う	12	親類や友人などの死			37	37			24			13	37
	13	親族や友人などの病氣		2	16	18	2		5		1	10	18
	14	好きな人が他の人と付き合っている(三角関係)		1	8	9					6	3	9
	15	気がついたら間に合わない時刻			3	3			3				3
	16	人に怪我させた(大失敗)			2	2					2		2
	17	受験不合格			1	1						1	1
				3	67	70	2		32		9	27	70
				4.3	95.7		2.9		45.7		12.9	51.4	100.0
Ⅲ. 思いもよらない事実や出来事や考え方	18	自分、家族、友人に関する意外な事実	9	14	5	28	4				3	21	28
	19	自分と違う他人の行為や考え方	2	13	5	20	1		1		13	5	20
	20	意外な出来事	1	8	7	16	1		3		3	9	16
	21	思いもよらない付き合い	1	11		12			1		1	10	12
	22	演奏・プレーなどのレベルの高さ	9			9	6	1				2	9
	23	自分自身の新たな面	2	4	3	9						9	9
	24	家族・友人の思いもよらない行為		3	3	6			2		2	2	6
	25	桁外れの出来事	1	5		6	5					1	6
	26	超常現象や神秘体験		5	1	6					6		6
	27	親しい人の犯罪行為			6	6					4	2	6
	28	全く同じ出来事	3	1		4	4						4
	29	親・友人の不倫・浮気			4	4					4		4
	30	世の中の複雑さ		2		2						2	2
			28	66	34	128	21	1	7		36	63	128
			21.9	51.6	26.6		16.5	0.8	5.5		28.1	49.2	100.0
Ⅳ. 思いもよらない大きな変化	31	親しい人や著名人の結婚や妊娠・出産	30	3		33			8			25	33
	32	身体や精神の大きな変化	14	10	5	29			4		1	24	29
	33	親しい人が会社・学校・バイト・部活などを辞めた		1	13	14			8		2	4	14
	34	突然の物音や静寂		1	3	4			4				4
			44	15	21	80			24		3	53	80
			55.0	18.8	26.3				30.0		3.8	66.3	100.0
Ⅴ. 身の危険を感じる出来事	35	交通事故や怪我			36	36			24		1	11	36
	36	テロや通り魔事件など		1	12	13						13	13
	37	ゴキブリやヘビなど			12	12			12				12
	38	脅かされる		3	5	8			8				8
	39	怖い出来事		7	1	8					1		8
	40	人や動物の急な飛び出し		1	6	7		4	3				7
	41	襲われる			5	5					2		5
	42	隣家が火事			3	3			3				3
	43	飼いだの残酷な行為			3	3						3	3
	44	大震災		2		2	2						2
				12	85	97	2						97
				12.4	87.6		2.1	4.1	61.9		17.5	14.4	100.0
	45	その他	3	3	1	7						7	7
	合計		268	102	208	578	53	14	150	8	72	281	578
			46.4	17.6	36.0	100.0	9.2	2.4	26.0	1.4	12.5	48.6	100.0

の構成%を見ると、『Ⅰ. 大切なものを得ることに対する驚き』では、プラス感情に属するものが98.5%、中性感情が1.5%、マイナス感情は0%で、これに対し、『Ⅱ. 大切なものを失うことに対する驚き』では、プラス感情は0%、中性感情は4.3%、マイナス感情が95.7%であった。『Ⅲ. 思いもよらない事実や出来事や考え方』では、プラス感情21.9%、中性感情51.6%、マイナス感情26.6%であり、『Ⅳ. 思いもよらない大きな変化』では、プラス感情55.0%、中性感情18.8%、マイナス感情26.3%であった。また、『Ⅴ. 身の危険を感じる出来事』においては、プラス感情は0%、中性感情は12.4%、マイナス感情が87.6%を示した。

考 察

1. 驚き体験578の記述から、「どういう場合、状況で驚いたか」について分類した結果、全ての驚き体験は、1) 予想外の出来事、2) 想像外の出来事、3) 偶然の出来事、4) 突然の出来事、5) 初めて体験する出来事、6) 希な（めったにない）出来事のいずれかであり、これらは、いずれも、広い意味での予想外（予期しなかった、予想以上の、思いもよらない、想像できない、偶然の、突然の、初めての、めったにない）の事象に対する体験であった。

このことは、驚きの感情が、「予想外」の事象に対して生起する感情であるという特徴を持っていることを示すものである。同時に、体験する（している）事象が「予想外」であるということは、それらの事象に直面したその瞬間は、「初めて」の体験と同じであることを意味することになる。ここから、さまざまな感情（喜、怒、悲、嫌、etc）を意識させる諸対象（諸事象）に我々が直面した時、最初に意識する感情が「驚き」であることが示唆される。

2. 驚き体験は、「驚きの対象（誰に、また何に驚いたか）」についての分類から、その内容が大きく5つに分類できることが示され、これらの対象や事象の感情価は、『大切なものを得る』内容の場合には、（例外的に中性感情を示すものもあるが）ほとんどがプラス（ポジティブ）感情を示し、反対に、『大切なものを失う』内容の場合には、ほとんどがマイナス（ネガティブ）感情を示すものであった。

このことは、先行研究（鈴木賢男、鈴木国威、上杉喬 2003）において、「大切なものを得る」ことが喜び（プラス感情）と結びつき、また「大切なものを失う」ことが悲しみ（マイナス感情）と結びついていることと一致し、このような場合に、我々が、まず驚きの感情を意識し、次いで喜び（または悲しみ）の感情が意識されるという推論を可能にするものである。

また、「身の危険を感じる出来事」の場合には、一部は中性感情を示すが、多くはマイナス（ネガティブ）感情を示した。このことは、「交通事故や怪我」また「テロや通り魔事件など」に対し、先行研究（上杉喬、榎場真知子、馬場史津 2002）において、怒り（マイナス感情）や憎い（マイナス感情）が結びついていることと一致し、このような場合に、我々がまず驚き、ついで怒りや憎いなどの感情を意識するという推論を可能にするものである。

これに対し、『思いもよらない事実・出来事・考え方』においては、中性感情がほぼ半数を示し、プラス感情のものとマイナス感情のものが、残りを分け合っていた。また、『思いもよらない大きな変化』では、プラス感情が半数を超えるが、中性感情もマイナス感情も20%前後を占めていた。これらの結果は、驚きの感情を引き起こし意識させる事象が、固有の感情価（プラスv.s.マイナス及び中性）を持っており、我々が、まず驚き、ついで、固有の感情価と結びついた諸感情が生じ意識するということを示唆するものである。

なお、驚きの感情がプラス感情、マイナス感情、および中性感情のいずれとも結びついていることは、感情イメージに関する先行研究（上杉喬 1981, 1983, 1984, 1989, 1998）とも一致し、他の諸感情（例えば、喜び、悲しみ、恐れ、怒り、嫌いなど）が、それぞれ、固有のプラス感情ないしマイナス感情のいずれかと結びついていることとの差異を示すものである。

研究2 寂しいについて（分担執筆 岡本かおり）

1. 寂しい体験の分類

調査対象者607名のうち、寂しい体験を具体的に記述した者は588名（96.87%）、記述しなかった者は19名であった。自由記述によって収集された「寂しい」という感情を最も強く抱いた体験は、次の28のカテゴリー（1～28）に分類することが出来た。

（注）体験時の年齢を（ ）内に示す。

- 1) 卒業：「高校卒業したこと（18才）」「授業も終わり、卒業も間近に迫った時（15才）」
- 2) 行事/出来事：何か特別な行事やイベントをきっかけに、あるいは出来事や事件をきっかけに「寂しい」体験をしたもの。「クリスマスを一人で過ごした時（18）」「誕生日を忘れられた（15）」「デパートで迷子になったとき（8）」など。
- 3) 動物やペットの死：「小鳥が死んでしまったとき（11）」「ナリタブライアンが死んだ（18）」
- 4) 身近な人の死：祖父母、親戚、友人の死去によるもの。「友人が自殺したとき（17）」「祖母が亡くなったとき（21）」「じいちゃんが死んでもう会えないんだと感じるとき（19）」
- 5) 死/老い/生について考えたとき：人の寿命や限界、老いを感じて。「死について考えた夜（19）」「生きている意味を考えたとき（いつも）」「人間は死ぬ時は一人だと気付いたとき（12）」など。
- 6) 漠然と：明確な出来事はないが、なんとなく孤独を感じたもの。「ときどき定期的に理由もなく（～22）」「青年期危機か？！（16）」「ふと自分は一人だと思ったとき（20）」
- 7) 季節を感じて：「冬の香りを感じたとき（18）」「秋の風が吹くと感じる（20）」
- 8) 環境への不適応：新しい環境や、学校生活等に馴染めないでいたとき。「大学に入って間もない頃（18）」「転校したてのころ（10）」「登校拒否（15）」など。
- 9) 集団/人と一緒のとき：集団の中にいるのだが溶け込めないとき。「友人の輪の中に入れなかったとき（11）」「集まりなどで自分が素直に一緒に楽しめない時（18）」
- 10) 人・集団から離れたとき：一定時間一緒に過ごした人・集団から離れたとき。「親戚、従兄弟が集まって遊んで皆が帰ったあと（9）」「にぎやかだった部屋から皆が帰って、一人になった（20）」
- 11) 病気・怪我：体調の不良や病気・怪我などをした。「風邪で学校を休んで寝込んでいて、一人ぼっちのとき（8）」「病院に入院したとき（18）」
- 12) 留守番：「はじめて一人で、一日中留守番をしたとき（5）」「一人で留守番をしているとき（10）」
- 13) 日常的な分離：度々繰り返された、あるいは日常的な両親との分離体験。「母親が仕事に行く前に泣きついたこと（5）」「かぎっ子で一人で家にいたとき（小学生）」
- 14) 両親/親しい人の不在（短時間）：家族・両親が急に居なくなったり、分離させられたもの。「家に帰ったらいつもいるはずの母親がいなかった（7）」「暗闇で目覚めたら隣に母親がいな

かったこと (4)」「仲の良い友達が学校を休んでいなかった (14)」など。

- 15) 長期間の分離：親しい者や家族と、理由があって長期間、分離した体験。「友人が留学した (16)」「母親が入院して家にいなかった (7)」「夏休みに自分以外の友人がいっせいに実家に帰ってしまった (19)」
- 16) 別れ：二度と会えない、あるいは滅多に会えなくなるような別離体験。「友達が引越しをしてしまった (12)」「ホームステイから帰ってきたとき (18)」「友達が高校を辞めて、新学期を迎えた時 (17)」など。
- 17) 無理解や誤解：真意を分かってももらえない、誤解をされた、相手を信用できないなどの対人関係上の行き違い。「クラスの皆とケンカをしている最中 (6)」「努力しても評価されなかったとき (15)」「友人に裏切られたとき (17)」
- 18) 存在/認知：存在や発言が無視されたり気付いてもらえないとき。「小学校の時に受けたいじめで、クラスの女子に無視された (10)」「仲の良い友達が自分を抜かして遊んでいたのを知ったとき (15)」「誰もかまってくれなかったとき (19)」
- 19) 連絡（電話・メール）が取れない：友人と連絡が取れない、電話を切るときなど、間接的なコミュニケーション・ツールから感じたもの。「メールを送っても返事が来なかった (19)」「何人かの友人に電話して、そのあと一人になった時の瞬間 (17)」
- 20) 一人暮らし：主に大学入学時、一人暮らしを始めた直後に感じたもの。
- 21) 一人で食事：一人で食事をする際に感じたもの。
- 22) 一人で何かしている：「一人で家でTVを見るとき (19)」「一人で旅をしていたとき (20)」
- 23) 一人である：「急に一人になるとき (17)」「一人で部屋にいるとき (18)」「何もすることがなくて一人にいるとき (いつも)」など。
- 24) 夜：「夜一人で家にいた (19)」「夜、時々 (16)」「夜一人で寝ているとき (19)」など、夜と明記してあるもの。
- 25) 恋愛：好きな人と思うように会えない、恋愛が上手くいかず切ない思いをして。「好きな人に会えないとき (19)」「彼女が二股したとき (20)」
- 26) 失恋：「彼女と別れたとき (20)」「好きな人に彼女がいると分かったとき (19)」
- 27) 他者の恋愛/幸せを見て：「友達に彼女が出来たとき (17)」「買い物先などで仲の良さそうなカップルがたくさんいる時 (19)」
- 28) 受験・浪人：受験や浪人で、人との違いや孤独を感じて。「浪人中、ずっと勉強していたとき (18)」「浪人中、大学へいった友人が地元に戻ってきたとき (19)」

結 果

1. 寂しい体験の分布

- 1) 寂しい体験の分類カテゴリーごとの頻度を、表2-1に示した。最も強く寂しいと感じた体験は、「一人暮らし」であった (83名14.12%)。ついで「一人のとき」(41名6.97%)、3位は「長期間の分離」(38名6.46%)、4位「存在/認知」(32名5.44%) 5位「無理解や誤解」(31名5.27%)であった。
- 2) 寂しいという感情を最も強く感じたのは何歳ぐらいの出来事だったのか、年齢の頻度との関係を集計したところ3歳から24歳と幅広い報告があった。尚、年齢不明の38名の内訳は、無

表2-1 寂しい体験と年齢別頻度

年 齢 内 容	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	24	(不明)	総計
卒 業										1			4			6			1				12
行事/出来事				1		2	2		2			2	2	1		2	2	2				1	19
ペットの死									1		1	1	1	2	1	3			1	1			12
身近な人の死						1				1		1		1	2	1	1		1				9
死/老い/生を考えて								1		1		1		1			1		1			1	7
漠然と									1				1	3	1	6	4	3				8	27
季節を感じて																1	1	1				1	4
集団/環境不適應					1	1	1	2					2	2		2	2	1					14
集団/人と一緒のとき									1			1		2	1	6	1	1				2	15
集団/人と離れたとき								1				1	1		3	1	4	3					14
病気/怪我			1	1		1			3			1			1	2	6						16
留守番	1	3	4	3	4	2	2	2								1							22
分離不安		2	1	1	7		2					1	1									3	18
両親の不在		5	4	3	3	3	4	2				1				1							26
長期の分離	1				1						2			1	4	11	10	5	1			2	38
別 れ				1	3	1	2	4	3	2	1	2	2		3	2	4	1					31
無理解や誤解	1			1		1		2	1	1	3	1	3	3	3	4	3	2	1			1	31
存在/認知			2			1	1	2	5	4	1		3		1	1	5	2	1			3	32
連絡(電話/メール)														1	1	2	1	4	1				10
一人暮らし										1				1		45	30	6					83
一人で食事								1					1			3	3	1				1	10
一人で何かしている					1									1	2		1	2	1				8
一人のとき			3	1	1		1		1			1	1		4	7	7	6	1		1	6	41
夜					1			1			1	1		1		2	6	2		1		5	21
恋 愛														3		2	12	7	3			2	29
失 恋												1		1	4		5	4				1	16
他者の恋愛/幸せ															3	3	4	1			1	1	13
浪人/受験																3	5	1					9
合 計	3	10	15	12	22	13	16	17	18	11	9	16	22	24	34	117	118	55	13	2	2	38	587

記名であった者21名(55.26%)、「いつも」「ときどき」などと頻度で書いた者12名(31.58%)、「子供の頃」「秋から冬」など特に年齢を指定しなかった者5名(13.16%)であった。「小・中・高校で」などと複数記述には一番若い年齢を、「小学校」「中学校」「高校」と書いてあったものに対しては間をとって9歳、14歳、17歳とし、「今」というものには「20歳」とした。最多年齢は19歳(118名20.07%)、次いで18歳(117名19.90%)、3位20歳(55名9.35%)であった。本調査は大学生が対象の調査であるが、実年齢と寂しい体験の報告年齢は近接していた。寂しいと最も強く感じた体験は、約半数の者が18歳から20歳の間だと報告した。

3) 寂しい体験と年齢の関係

「留守番」「日常的な分離」「両親/親しい者の不在」は共に、4歳から10歳に多く報告があった(55名10%)。「恋愛」「失恋」「他者の恋愛/幸せ」では16歳から21歳に報告が集中した(52名9.45%)「集団/環境不適応」「集団/人と一緒のとき」「集団/人と離れたとき」では14歳から20歳に比較的集中した。「行事/出来事」「別れ」「無理解や誤解」「存在/認知」では3歳から21歳の範囲で幅広くみられた。

考 察

1. 寂しい体験は、年齢ごとの行動範囲と対人関係が影響を及ぼしていると思われる。半数の者が「一人暮らし」をあげたことから、大学入学を機に親元から離れて一人暮らしを始める際に、感じる人が多い体験だと思われる。家族・地理・人間的環境から離れて、新生活を始める段階で強烈な印象をもつのだろう。また3～5歳の幼児期に寂しい体験をしたという者は、「留守番」「習慣化された分離」「両親/親しい者の不在」を中心であり、分類されたカテゴリーは9個であった。これらの年齢では家族に守られて過ごす時間が多く生活環境も限られている。両親が居ないことによって寂しさを体験したというのもうなづけよう。6歳～12歳の学童期となると、引き続いて「留守番」体験、その他に引越などによる「別れ」、「病気/怪我」の体験、「無理解や誤解」「存在/認知」の度数も増え分類カテゴリーも22個であった。13～17歳をみると、思春期に入るためか報告されたものは「集団/人と一緒のとき」「連絡(電話・メール)」「他者の恋愛/幸せ」「恋愛」と分類カテゴリーも増え、対人関係を通しての寂しい体験が述べられた。16歳以上からは寂しい体験はカテゴリー全般に広がるが、「習慣化された分離」の報告はなくなり、「留守番」「両親の不在」も各一人に留まった。我々は年齢とともに行動範囲が広がり、様々な体験をするようになる。すると自然、求める対象も内容も増え、叶わないことや手に入らないものも生じてくるだろう。両親が傍にいてくれれば満ち足りていた世界から、友達や恋人を求め、共感や理解を欲するようになる。求めるものが欠けているときに寂しい体験が生じると仮定すると、年齢とともに社会的で対人関係的な分類カテゴリーが増えて寂しい体験も多様化するものと考えられよう。
2. 報告された寂しいと最も強く感じた体験の状況は、「一人ぼっち」や「孤独」を実感するときと言えるのではないだろうか。その状況が人によって異なるので、「誕生日を忘れられた」り、「じいちゃんが死んでもう会えないんだと感じるとき」であったり、「大勢の人といのに孤独を感じ」たり、「クラス全員に無視されてとても寂しかった」りするのだろう。カテゴリー分類の内容を本調査では28個に分類したが、言い換えればそれは28通りの「一人ぼっち」や

「孤独」を実感する状況と考えられる。

研究3 愛しいについて（分担執筆 平宮正志）

1. 「愛しい」体験の分類

調査対象者607名のうち、「愛しい」体験を具体的に記述したものは573名（94.4%）、記述しなかったものは34名（5.6%）であり、この34名中10名は「愛しい体験がない」とする者で、24名がブランク（無記入）であった。

愛しい体験をその対象・状況・内容によって分類したところ、以下のように（合計567名）分類することができた。Ⅰ～Ⅸは対象による分類、1～12は状況による分類、1)～37)は内容による分類を表している。（注）体験時の年齢を（ ）内に示す。

Ⅰ. 好きな人（恋人、友人等）を対象として感じた

1. 好きな人その人自身に対して心を許した

【恋人を対象として】

- 1) 好きな人のことを考え感じた：例えば、「好きな人のことを考えているとき（19才）」など
- 2) 会いたくとも会えない、好きな人のことを考え感じた：「好きな人に会いたくとも会えないとき（19）」など
- 3) 初めて好きな人ができた（初恋）という喜びの中で感じた：「初めて好きな人ができた時（14）」など
- 4) 好きな人ができたという喜びの中で感じた：「バイトで好きな人ができた（18）」など
- 5) 好きな人が一生懸命努力する姿を見て感じた：「好きな人が一生懸命仕事に打ち込んでいるのを見るとき（24）」など

【恋人以外の、好きな人（友人等）を対象として】

- 6) 親しい人の、存在そのものに対して感じた：「すごく大事だと思える人のことを想っていたとき（18）」など
- 7) 他者が自分自身の弱い面をさらけ出した時に感じた：「普段強がっていた人が弱い部分を見せたとき（20）」など

2. 好きな人の側で一緒に行動することができた

【恋人を対象として】

- 8) 好きな人の側で、行動を共にしている時に感じた：「好きな人と話している時（18）」など
- 9) 好きな人と、異性としての付き合いができた時に感じた：「恋人と一緒に夜眠るとき（19）」など

【恋人以外の、好きな人（友人等）を対象として】

- 10) 親しい人と行動を共にすることができた時に感じた：例えば、「友人と様々な話をし、信頼関係が深まったとき（18）」

3. 好きな人が自分に優しく接してくれた

【恋人を対象として】

- 11) 好きな人が、自分に優しく接してくれた時に感じた：「彼女が誕生日を祝ってくれた時（20）」など

12) 自分の中で、涙を流す恋人を見て感じた：「恋人が初めて私の中で泣いたこと (16)」など
【恋人以外の、好きな人 (友人等) を対象として】

13) 他者から自分自身が大切にされたと思えたときに感じた：「周囲の人が私のために何かをやってくれたとき (20)」など

II. 自分自身を対象として感じた

4. 自分自身の存在そのものに対して感じた

14) 自分自身の存在そのものに対して感じた：「アパートの下で猫を拾ってアパートではかえないことはわかっているのにえさなんかあげたりしちゃう自分が愛しいです (19)」など

III. 命そのものを対象として感じた

5. 新しい命 (人、小動物) が誕生した

15) 家族 (親族) に子どもが生まれた時に感じた：「弟が生まれたとき (4)」など

16) ペット (小動物) 等の出産に際して感じた：「生まれたばかりの子犬を見たこと (7)」など

6. 家族の病、又はペットの病・死に際して感じた

17) 家族に病人が出たときに感じた：「親が病気になったときに「大切にしなければ」と思ったこと (17)」など

18) ペットの病に際して感じた：「飼い犬がストレスで20回ぐらいはき、死ぬかと思ったけど病院に行ったら、次の日ぐらいに元気になり一番心配していた私に甘えてきた (17)」など

19) ペットの死に際して感じた：「飼っていたウサギが死んだときにとても愛しいものだったと改めて思った (18)」など

IV. 小さな子ども達を対象として感じた

7. 小さな子ども達を通して感じた

20) 小さな子ども達になつかれ感じた：「近所の子が私になついてくっついてきた時 (8)」など

21) 小さな子ども達と遊んでいる時に感じた：「ボランティアで幼い男の子と遊んだこと (22)」など

22) 小さな子ども達に対する、教育を通して感じた：「プールのインストラクターのバイトで、幼稚園の子どもたちを教えたとき (19)」など

23) 小さな子ども達の、存在そのものに対して感じた：「近所の赤ちゃん (6)」など

V. 小動物 (ペット) を対象として感じた

8. 動物 (ペット) を通して感じた

24) 小動物そのものに対して感じた：「子犬を見たとき (9)」など

25) 小動物が甘えてきた時に感じた：「猫の方から甘えてきてくれた時 (12)」など

26) 飼育する過程の中で、ペット (小動物) そのものに対して感じた：「飼っていたハムスターに対して (14)」など

27) 飼育する過程の中で、ペット (小動物) が甘えてきた時に感じた：「飼っている動物がなついてきた (19)」など

VI. 過去の思い出を対象として感じた

9. 過去の楽しかった思い出 (故郷) を思い出した

28) 古里を懐かしみ感じた：「一人暮らしでホームシックになった時、故郷が愛しい (19)」など

29) 過去の思い出を懐かしみ感じた：「幼稚園児時代に戻りたいと思ったこと (6)」など

VII. 家族を対象として感じた

10. 家族のことを思い感じた

- 30) 親のことを思い感じた：「1人で寂しかった時、母が仕事から帰って抱っこしてくれた (3)」など
- 31) 自分より年下の親族のことを思い感じた：「妹と遊んでいたとき (14)」など
- 32) 家族そのものに対して感じた：「家族っていいなと思ったとき (19)」など
- 33) 祖父母のことを思い出して感じた：「久しぶりに祖母に会った (20)」など
- 34) 久しぶりに家族から電話連絡を受け感じた：「一人暮らしで寂しかった時に、家族や友人が電話してくれたとき (18)」など
- 35) 家族と久しぶりに再開し感じた：「久しぶりに家族全員で集まった時の雰囲気 (20)」など

VIII. 努力し得たものを対象として感じた

11. 自らが一生懸命努力し得たものを思い浮かべた

- 36) 努力し得た大切なもの (コレクション等) に対して感じた：「一生懸命はたらいて大金はたいたバイクが完成間近だったとき (19)」など

IX. テレビ等の映像を対象として感じた

12. テレビ等を通して見た映像に心動かされた

- 37) テレビ (映画) 映像 (タレント、アニメ等) を通して感じた：「とっとこハム太郎のアニメを見た (20)」など

この分類より、「愛しい」という感情は、「初めて好きな人ができた」「一生懸命努力する姿に出会った」「小動物 (ペット) に子どもが生まれた」「家族と久しぶりに再開した」など、ある種の出来事 (変化) が起こった時に発生しやすい感情であるということが分かる。ちなみに、集計全体の約56% [2], 3], 4], 5], 7], 8], 9], 10], 11], 12], 13], 15], 16], 17], 18], 19], 20], 21], 22], 25], 27], 34], 35], 37] の合計÷調査対象者数607] がこのような傾向を示しており、それ以外のものの総和を上回っている。

結 果

1. 「愛しい」体験の分布 (表3-1の分析)

表3-1に、「愛しい対象 (誰に、または何に愛しさを感じたか)」(9分類, I～IX) と、「愛しい状況 (どういう場合に、愛しさを感じたか)」(12分類, 1～12) による年令別分布を示した (愛しいの内容による37分類は、表3-1の下段に示した)。年令別合計のパーセント (%) は、全体におけるその年令の占める割合 (年令別頻度数÷合計数567) を示したものである。また、構成パーセントは、年令ごとの、各状況 (12分類) における愛しいの割合を示したものである。

- 1) 最初に、各状況の30%以上の出現率を基準に見た場合、7才以下では、「5. 新しい命 (人、小動物) が誕生した (4才, 7才)」「8. 小動物 (ペット) を通して感じた (4～7才)」「10. 家族のことを思い感じた (3才)」に30%以上の出現率を見出すことができる。

次に、8～12才では、「8. 小動物 (ペット) を通して感じた (8～12才)」にのみ、30%以上の出現率を見出すことができる。

さらに、13～15才では、「1. 好きな人その人自身に対して心を許した (13才, 14才)」「8. 小動物 (ペット) を通して感じた (13才, 15才)」に30%以上の出現率を見出すことができる。

表3-1 「愛しい」(対象・状況による分類)の年齢別頻度

(年齢別頻度が30%以上は太字。)

対象	Ⅰ.好きな人（恋人、友人等）						Ⅱ.自分自身		Ⅲ.その他の（誕生、病気、死）				Ⅳ.小さな子ども達		Ⅴ.小動物（ペット）		Ⅵ.過去の思い出		Ⅶ.家族		Ⅷ.努力し得たもの		Ⅷ. テレビ等の映像		年齢別 合 計	
状況	1.好きな人その人自身に対して心を許した。		2.好きな人の側と一緒に行動することができた。		3.好きな人が自分に優しく接してくれた。		4.自分自身の存在そのものに対して感じた。		5.新しい命（人、小動物）が誕生した。		6.家族の病、又はペットの病・死に際して感じた。		7.小さな子ども達を通して感じた。		8.小動物（ペット）を通して感じた。		9.過去の楽しかった思い出（故郷）を思い出した。		10.家族のことを思い出した。		11.自らが一生懸命努力し得たものを思い浮かべた。		12.テレビ等を通して見た映像に心動かされた。			
年齢	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
3									1	25.0							1	25.0	2	50.0					4	0.7
4									3	37.5					3	37.5	1	12.5	1	12.5					8	1.4
5									1	20.0					3	60.0			1	20.0					5	0.9
6	1	5.9							2	11.8	1	5.9	1	5.9	9	52.9	1	5.9	1	5.9			1	5.9	17	3.0
7									4	30.8			1	7.7	5	38.5			3	23.1					13	2.3
8	1	7.1										1	7.1	10	71.4	1	7.1	1	7.1					14	2.5	
9	2	14.3												9	64.3			3	21.4					14	2.5	
10									2	11.1	1	5.6			15	83.3								18	3.2	
11	1	16.7											1	16.7	4	66.7								6	1.1	
12	4	23.5	1	5.9					1	5.9					9	52.9			1	5.9			1	5.9	17	3.0
13	5	41.7	1	8.3											5	41.7			1	8.3					12	2.1
14	11	47.8	1	4.3					2	8.7			1	4.3	3	13.0	1	4.3	3	13.0	1	4.3			23	4.1
15	3	15.8	2	10.5					1	5.3					10	52.6	1	5.3	1	5.3			1	5.3	19	3.4
16	5	20.0	6	24.0	3	12.0									5	20.0			4	16.0	2	8.0			25	4.4
17	7	19.4	6	16.7	7	19.4			2	5.6	3	8.3			6	16.7	1	2.8	3	8.3			1	2.8	36	6.3
18	26	34.7	15	20.0	7	9.3			1	1.3	2	2.7	5	6.7	9	12.0			8	10.7	1	1.3	1	1.3	75	13.2
19	26	19.8	38	29.0	13	9.9	2	1.5	2	1.5	1	0.8	9	6.9	21	16.0	4	3.1	12	9.2	3	2.3			131	23.1
20	15	21.7	26	37.7	6	8.7	1	1.4	2	2.9			4	5.8	8	11.6	2	2.9	4	5.8			1	1.4	69	12.2
21	4	20.0	8	40.0	2	10.0							2	10.0	4	20.0									20	3.5
22	1	25.0											1	25.0	1	25.0			1	25.0					4	0.7
23	1	33.3	2	66.7																					3	0.5
24	2	100.0																							2	0.4
不明	4	12.5	6	18.8	1	3.1							1	3.1	15	46.9	1	3.1	4	12.5					32	5.6
計	119	21.0	112	19.8	39	6.9	3	0.5	24	4.2	8	1.4	27	4.8	154	27.2	14	2.5	54	9.5	7	1.2	6	1.1	567	100.0

(上記に対応する内容による分類番号)

内容	1) ~7)	8) ~10)	11) ~13)	14)	15), 16)	17) ~19)	20) ~23)	24) ~27)	28), 29)	30) ~35)	36)	37)	計1) ~37)
----	--------	---------	----------	-----	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----	-----	----------

なお、「8. 小動物（ペット）を通して感じた」は、これ以降、30%以上の出現率はない。

最後に、16歳以降の年齢についてみた場合、「1. 好きな人その人自身に対して心を許した（18才、23才、24才）」「3. 好きな人の側で一緒に行動することができた（20才、21才、23才）」の2分類についてのみ、30%以上の出現率を見出すことができる。なお、この2分類はいずれも「I. 好きな人」を対象としての分類である。

- 2) 次に、年齢ごとの出現率について見た場合、18～20才の出現率が極めて高く、全体の約半数近くの48.5%（18～20才の頻度合計÷567、年齢による平均出現頻度91.7個）がこの年齢層に集中している。逆に、3～5才（3.0%、年齢による平均出現頻度5.7個）、11～13才（6.2%、年齢による平均出現頻度11.7個）の出現率が極めて低い。
- 3) 対象ごとの出現率で見た場合、「I. 好きな人を対象として感じた」が最も高く47.6%、続いて「V. 小動物（ペット）を対象として感じた」の27.2%、「VII. 家族を対象として感じた」の9.5%の順になっている。
- 4) 対象ごとの、出現年齢について調べてみると、「II. 自分自身を対象として感じた」が最も遅く19才、「VIII. 努力し得たものを対象として感じた」が次に遅く14才となっている。
- 5) 「VII. 家族を対象として感じた」の出現率は、3才（50.0%）を除けば、いずれも25%以下である。ただし、「VII. 家族を対象として感じた」の出現は、20才以下では、10才、11才のみ無く、その他の全ての年齢においてカウントされている。
- 6) 発生の集中という観点から見た場合、「3. 好きな人が自分に優しく接してくれた」が16才から21才、「4. 自分自身の存在そのものに対して感じた」が19才から20才、「11. 自らが一生懸命努力し得たものを思い浮かべた」が14才から19才に、全て集中している。
また、頻度こそ少ないが、「6. 家族の病、又はペットの病・死に際して感じた」の8個中6個が17～19才、「7. 小さな子ども達を通して感じた」の27個中21個が18～22才に、それぞれ集中している。
- 7) 発生の類似という観点から見た場合、「9. 過去の楽しかった思い出（故郷）を思い出した」と「10. 家族のことを思い感じた」が、頻度の差こそあれ、10才、11才が共に出現していないなど、分布状況が類似している。
また、発生の分散という観点から見た場合、「12. テレビ等を通して見た映像に心動かされた」が、頻度こそ少ないが、6才から20才までの各年齢層に分散し発生している。

考 察

1. 「愛しい」の内容の発達的变化

本研究における調査は、「これこれの愛しい感情をはじめて感じたのは何才頃であるか」ではなく、「今までの体験の中で、愛しい感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して」記述してもらうものであった。しかしながら、表3-1に示された結果は、「愛しい」の感情が発達的に変化する様子を示唆している。

すなわち、7才以下では、「愛しい」の感情体験は、「5. 新しい命（人、小動物）が誕生した」「10. 家族のことを思い感じた」「8. 小動物（ペット）を通して感じた」に比重をおいて生じる。このことは、この頃の子どもが、家族（親、兄弟、ペット）との関係を中心とする世界で生きていることと一致する。

子どもは成長するにつれ、新しい命・家族ばかりでなく、周りの小動物（ペット）に対しても強い関心を示す（8～12才）。

やがて、第2次成長期を迎えるにあたり、異性を中心とする好きな人への関心が急速に高まっていく。13～15才では、「8. 小動物（ペット）を通して感じた」と「1.好きな人その人自身に対して心を許した」の双方を選択する者の数が拮抗するが、その後、16, 17才を中心に「1.好きな人その人自身に対して心を許した」、「2.好きな人の側で一緒に行動することができた」、「3.好きな人が自分に優しく接してくれた」が主となっていく。

その後、愛しさの対象（I.好きな人）は変わらないが、以前までの心を許すだけではなく「共に行動する」、すなわち「2.好きな人の側で一緒に行動することができた」が大学生時代（19～21才）を中心に顕著な高まりを見せる。

2. 「愛しい」の構造

愛しいの発達的变化は、幼児期には主として「新しい命」「家族」「小動物（ペット）」、学童期には主として「小動物（ペット）」、そして思春期には主として「好きな人」を対象に係わっていることを示した。これらはいずれも、それぞれの発達段階において身近な存在（例えば、幼児期における年下の兄弟や親族、思春期における恋人など）であり、自分の力の範囲内において係わりを持ち、かつ自分の中に取り入れることができるという特徴（「新しい命」 \leq 「小動物（ペット）」 \leq 「好きな人」※）を持っている（なお「家族」については、親が子育てを行う、年上の兄弟が年下の兄弟の面倒を見るなどの慣習からして、恒常的にこの特徴を持つものと考えられる。）。

「愛しい」の対象を分析することにより、さらなる構造が浮かび上がってくる。それは、その対象が、自分より力が弱い（小さな子ども達、小動物（ペット）、過去の思い出、努力し得たものなど）か、あるいは同等の力を持つもの（好きな人、自分自身、命そのもの、家族など）が中心であり、自分より力の強いもの（例えば、大人、兄、高校教師など）に対しては、発生しにくい感情であるということである。

以上の事をまとめて言うならば、「愛しい」とは、自分より弱いあるいは同等の力を持つものを中心に、自分の中に取り入れていく過程の中で生じる感情、とすることができる。

※ 「新しい命」 \leq 「小動物（ペット）」 \leq 「好きな人」という力関係が成り立つ。なぜならば、生まれたばかりの命は、その命のみでは生き抜くことができず（例えばアヴェロンの野生児）常に外界から何らかの手助けを必要とする（「新しい命」 \leq 「小動物（ペット）」）。さらに、ペットを中心とする小動物は、首輪をされるなど、自らの意志に関係なく、飼い主に何らかの隷を強要される（「小動物（ペット）」 \leq 「好きな人」）。以上のような理由により、「新しい命」 \leq 「小動物（ペット）」 \leq 「好きな人」の関係式が成り立つ。

図3-1は、愛しいの構造である。それぞれの発達段階において、自分の一部として対象を取り入れながら、大きくなっていく様子を示している。なお、（対象1）については、その後の様々な感情体験や忘却等によって、形を変えながらも、対象1を通して得たものを残している様子を示している。

3. 「愛しい」の生起

愛しいという感情が、何らかの出来事（変化）が起こった時に発生しやすい感情であるということは先に述べた。ここでは、年令別頻度から見た愛しいという感情の発生のしやすさにつ

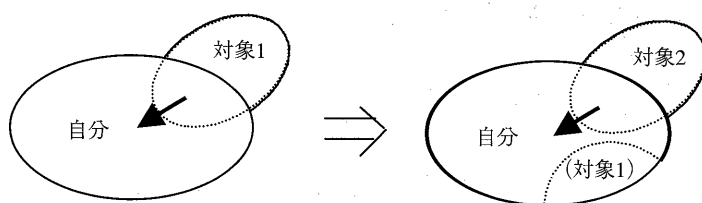


図3-1 愛しい構造

いて考察してみたい。

表3-1の分析で述べたように、18～20才での愛しさの出現率（48.5％）が極めて高いのに対して、3～5才及び11～13才での出現率（3.0％、6.2％）は極めて低い。なお、上杉他（2002）の研究によれば、「憎い」のこの時期での発生率は3～5才の場合4.3％、11～13才の場合16.4％、18～20才の場合31.4％、また鈴木他（2003）の研究によれば、「悲しい」のこの時期での発生率は3～5才の場合3.2％、11～13才の場合14.5％、18～20才の場合34.0％となっている（表3-2）。

表3-2 各年齢層における愛しい・憎い・悲しいの占める割合（％）

	3～5才 (第1反抗期)	11～13才 (第2反抗期)	18～20才 (大学生時代)
愛しい	3.0	6.2	48.5
憎い	4.3	16.4	31.4
悲しい	3.2	14.5	34.0

18～20才が大学受験を終え、大学生生活を送っている時期であるのに対して、3～5才、11～13才は第1反抗期、第2反抗期とほぼ重なり、親や権威者に向かって反動的な態度をとるなど、拒否・攻撃・自己主張等の傾向が強まる時期である。この点に注目するならば、愛しいという感情は、反抗期などのような時期よりも、むしろ自らの身分や生活が保障され、かつ自由に交友の和・活動の場を広げることができるような時期（大学生時代）、言葉を変えるならば、気持ちにゆとりと優しさがある時期に、発生しやすい感情と考えられる。

このことを裏付ける例として、「大学に入って、はじめて、すきではなく、愛しい人ができた（18才）」「一人暮らしをはじめて、1ヶ月くらいしたときに家族が愛しくなった（19才）」「バイト先の教え子たちがかわいくてたまらないと感じた時（19才）」「野良猫の産んだ子猫が一匹だけ取り残されていたとき、とても可愛くて一生懸命歩こうとする姿を見て抱きしめなくなったとき（19才）」「本当に好きな人ができて、その人と付き合った（20才）」「アメリカのもう一つの家族（ホストファミリーのこと）に早く会いたい（20才）」「今一緒に活動している体育会の人、特に自分の部活の人全て（21才）」「自分が支えられて生きていると考えた時。自分の周りの人（親、兄弟、友人など）全てが愛しく感じた（21才）」など、多数あげることができる（ちなみに、分類された567記述中295記述（52.0％）が、18～21才に集中している）。

これらはいずれも、大学生活を通してのゆとりと優しさの気持ちの中で、愛しいという感情を感じたものと考えられる。

4. 状況による「愛しい」の分布の集中

表3-1の分析の箇所ですべて述べたように、「3. 好きな人が自分に優しく接してくれた」「4. 自分自身の存在そのものに対して感じた」「11. 自らが一生懸命努力し得たものを思い浮かべた」の発生が、いずれも14才から21才までの間に集中している。

この年齢層は、青年前期・中期に位置しており、特徴として、シュプリンガー (Spranger, E.) が青春期の心的構造の徴候として指摘しているところの、「自我の発見」「個々の生活領域への進展」との関連が予想される。なお、このことを裏付ける例として、3. の「外見が好みというのではなく、人間的に尊敬しお互いに成長できるような女性と付き合ったとき (18才)」や、4. の「人を好きになって、今までの氷のような自分が、変わっていったことを自覚する内に (20才)」や、11. の「部活動で学んだり考えたりした経験 (16才)」などを上げることができる。

また、「6. 家族の病、又はペットの病・死に際して感じた」の8名中6名が17～19才に、「7. 小さな子ども達を通して感じた」の27名中21名が18～22才に、それぞれ集中し発生している。それらの理由として、6. の場合、親などの高齢化にともなう病・死と出会う機会の増加（例えば「母親が病気になったのを聞いて (19才)」）、7. の場合、保育者（教育者）として小さな子ども達と出会う機会の増加（例えば「養護学校の介護体験で担当した子 (19才)」）などが考えられる。

5. 状況による「愛しい」の分布の類似と分散

表3-1の分析の箇所ですべて述べたように、分布の類似という観点から見た場合、「9. 過去の楽しかった思い出（故郷）を思い出した」と「10. 家族のことを思い感じた」が、頻度の差こそあれ、類似しているように思われる。これはある意味、大学入学以前の生活が、家族と共にあることと一致する。例としては、9. の「地元に関するもの・人全て。家族や駅や町や地元の友人に触れたとき (20才)」や10. の「妹が自分のために誕生日カードを作ってくれたとき (16才)」などが上げられる。

また、発生の分散という観点から見た場合、「12. テレビ等を通して見た映像に心動かされた」が、各年齢層に分散している（例えば「キャプテン翼くんが好き (6才)」「初めて森高をテレビで見たとき。ビビッときた (12才)」「世界の貧しい人々をテレビで見た時 (15才)」「となりのトトロのメイちゃん (18才)」など）。頻度が少ないので、明確なことは言えないが、テレビ等を中心とする映像の影響が、大学生以下の、広い範囲の年齢層の若者に及んでいることが予想される。

研究4 空しいについて（分担執筆 吉川延代）

1. 空しい体験の分類

調査対象者607名のうち、空しい体験内容と体験年齢を記述した者は560名（92.3%）、体験年齢を具体的に記述しなかった者は15名（2.4%）、体験内容を記述しなかった者は32名（5.3%）であった。自由記述によって収集された「空しい」という感情を最も強く抱いた体験内容は、次の35のカテゴリー（1～35）に分類された。それらの項目は以下の「実存的問題」、「自己」、「漠然」、「行為」、「行為の後」、「喪失」、「対人関係」、「孤独」、「金銭」、「その他」の10（I.～X.）の大分類にまとめることができた。（注）体験時の年齢を（ ）内に示す。

I 実存的問題

- 1) 人生の意味：例えば、「人生の意味が分からなくなってしまって生きるのが嫌になった時 (13才)」、「人生というのを真剣に考えた時 (14才)」、「何故生きているかと考えた (14才)」など、生きる意味を考えてははっきりとした答えを出せないような体験である。
- 2) 自分とは何か：「自分の存在について真剣に考えた時 (16)」、「自分って何だろうとふと思った時 (16)」、「自分の存在を疑った時 (17)」など、自分自身の存在に対する疑問、あるいは不全感の体験である。
- 3) 目標なし：「将来の夢とか目標を見つけられない時 (18)」、「将来に希望や目標を持てなくなった時 (18)」、「何の目標も生きがいもなく毎日の生活を淡々と繰り返した無気力な日々 (17)」など、生きる目標 (目的) が見つからないような体験や将来が見通せないような体験である。
- 4) 変化のない生活：「何もなくなただ過ぎていくだけのよう毎日で空しかった (14)」、「毎日同じ生活をしているなど感じた時 (16)」、「日々の生活が同じことの繰り返しだった時 (16)」など、毎日がただ過ぎていくだけと感じるような体験である。
- 5) 夢中になれない：「何をしても夢中になれない自分に気がついた時 (21)」、「何をやってもすぐ飽きてしまう時 (18)」、「何もかもに興味を持てなかった (8)」など、何に対しても興味を持てず、やる気が出ないような体験である。

II 自己

- 6) 挫折感：「何をしてもうまくいかなかった頃 (17)」、「何事もうまくいかない時 (16)」、「大学入試の推薦で落ちてしまった時 (18)」など、失敗による不全感の体験である。
- 7) 無力感：「自分は何も出来ないと気付いた (10)」、「自分の力ではどうにもならないことが起きた時 (18)」、「生きようとしめない人に生きて欲しいと伝えても、結局は伝わらず、自分には何も出来ないと気付いた時 (20)」など、自分自身や重要な他者に対して無力であると感じるような体験である。
- 8) 努力が報われない：「自分がいくら努力してもやりたいことがやれない時 (17)」、「死に物狂いで勉強したのに希望の大学には入れなかった時 (18)」、「高校の部活で努力が結果につながらなかった時 (17)」など、努力をしているのに報われないような体験である。
- 9) 劣っている自分：「自分だけ劣っていると感じてしまった時 (13)」、「自分について考えた時、誇れるものがないと思った (14)」、「自分にとっての理想の状態を想像した後 (21)」など、他者との比較や空想との比較などで自分自身が劣っていると感じる体験である。
- 10) 何もしない自堕落な自分：「自堕落な生活を痛感した (20)」、「受験が終わってダラダラ生活し、気付くと何もしていなかった (18)」、「夏休みにバイトもせずに家でダラダラしていた時期 (19)」など、やらねばならないことがあるのに、或いはしたいのに、やらずに過ごしてしまった自分自身への自責の体験である。

III 漠然

- 11) 暇であることなし：「何もすることがなく暇な時 (15)」、「時間はあるのに何をしたいか (勉強以外で) 分からなかった時 (年令不明)」、「何もすることがなく一日を過ごした時 (19)」など、時間はあるのにやることが見つからないような体験である。
- 12) なんとなく：「ほとんど毎日なんとなく (16)」、「一人高校の屋上でボーっとして空を眺めていた時 (17)」、「浪人している時、午後2時頃、岡の上で昼食を食べながら、秋の空を眺めていた時 (20)」など、具体的なものではなく、なんとなく感じるような体験である。

IV 行為

- 13) 受験勉強や授業：「浪人して机に向かって勉強している時 (18)」、「勉強、模試の繰り返しで全てが空しくなった (17)」、「高校の授業、どんな成績を取ろうが関係なかった、無価値 (17)」など、受験勉強や学校の授業に対して感じる体験である。
- 14) 行動の強制：「小学校の運動会の練習で長時間整列と行進ばかりやらされた時 (9)」、「楽しめず、ただ義務感のようなもので部活をしている時 (18)」、「バイト先で些細なことをやれと言われた時 (23)」など、自分の意に反して行動を強制される体験である。

V 行為の後

- 15) 卒業式・部活の引退：「高校の卒業式が終わった直後 (18)」、「卒業式に一人で帰った時 (18)」、「部活を引退した時 (15)」など、学校生活における「終了」の体験である。
- 16) 過食した後：「痩せようと決心したのに、ケーキの食べ放題に行ったら大量にケーキを食べてしまった直後 (18)」、「勉強してももう間に合わないと分かっている必要以上に食べたこと (18)」など、過食した体験と、「ダイエット中、テレビや雑誌で食べ物を見て満足しようとしていた時 (20)」という体験 (1名) もこれに含めた。
- 17) ゲームの後：「あまりに暇で友達と一晩中ゲームをやり続けて終わった時 (16)」、「高校時代何もせず同じゲームをやり、終わった後 (17)」、「休みの日一日中TVを見て過ごしたことに気付いた夜 (20)」など、長時間ゲームをしたりテレビを見たりして過ごした後に感じる体験である。
- 18) 楽しみの終了時：「旅行に行った最後の夜または最終日 (17)」、「夏休みが終わって実家から帰る時 (19)」、「5年間続いていた好きなテレビ番組が終了した時 (16)」など、楽しみにしていたことが終わってしまった時に感じる体験である。
- 19) 期待はずれ：「楽しみにしていたお出かけが突然駄目になった (7)」、「ライブで客がバンドの数より少なかった時 (16)」、「出来たと思ったテストの結果が非常に悪かった時 (19)」など、自分の期待を裏切られるような体験である。

VI 喪失

- 20) 大切なものを奪われる：「一生懸命書いた書道が、教室に張られたが、次の日なくなっていた時 (9)」、「祖父母の家が取り壊されたこと (11)」、「バイクを盗まれた時 (20)」など、自分にとって大切に感じていたものを奪われるような体験である。
- 21) 人の死：「祖父が突然死んだこと (19)」、「友達が亡くなった時 (17)」など、重要な他者の死の他に、『プライベート・ライアン』(戦争映画で)の冒頭の激しい戦闘シーンで、次々と死に行く兵士を見て (19)」など、一般的な死も含めた、人の死に対する体験である。
- 22) 失恋：「恋人と別れたこと (19)」、「好きだった人に新しい彼女が出来ていた時 (15)」、「頑張っても好きな人に振り向いてもらえなかった時 (12)」など、片思いも含めた恋に破れる体験である。

VII 対人関係

- 23) 恋人なし：「付き合っている人も好きな人もいない時 (21)」、「バレンタインに父にしかチョコを上げる相手がいなかった時 (18)」、「友人には彼女がいて、自分にはいない (21)」など、恋人がいない体験である。
- 24) 人に認められない：「自分が一生懸命やってきたことが人に認められなかった時 (18)」、「部活で自分の働きが認められていないと感じた時 (17)」、「私がどんな努力をしても父親に

響いていないと思った時 (10)」など、認めて欲しい人から認められなかったり、無視されたりするような体験である。

- 25) 他者への失望：「友人が私のいないところで私の悪口を言った時 (17)」、「約束をすっぽかされた時 (16)」、「友人に裏切られたこと (13)」など、他者への失望や不信、他者からの裏切りや約束不履行などの体験である。
- 26) 人間関係での躓き：「むかつく奴をぶっ飛ばして自分の言うことを聞かせていた。でも、友達が出来なくて、自分は空しい人間だと思った (12)」、「いじめを受けた時 (10)」、「友達と喧嘩した後 (11)」など、広く人間関係における躓きの体験である。
- 27) 自分の気持ちを表現できない：「自分の気持ちを素直に言えない時 (19)」、「伝えたいことが言葉に出来ない (20)」、「大切に思っている、伝え方が至らなくて寂しい思いをさせることしか出来ない時 (年令不明)」など、相手にうまく気持ちを伝えられないような体験である。
- 28) 人とつながらない：「誰かと遊びたくて外へ出たが誰も遊んでいなかった時 (8)」、「電話しても皆話中だった (18)」、「友人にEメールを何度も送信したのにもかかわらず、一通も返事が来なかったこと (19)」など、誰かと話したり遊んだりしたいのに誰ともつながらないような体験である。

VIII 孤独

- 29) 孤立感：「周りに溶け込めなかった自分 (学校で) (15)」、「皆が楽しそうに騒いでいるのに自分だけ楽しめない (16)」、「実は一人ぼっちじゃないかと思った時 (20)」など、心理的に孤立する体験である。
- 30) 一人のとき：「一人で家でボーっとしている時 (19)」、「家に帰っても誰もいなくて一人お菓子を食べている時、ふーっと思ひながら (16)」、など一人きりでの体験である。
- 31) 一人の食事やテレビ：「夜一人でテレビを見ている (17)」、「一人でテレビを見て大笑いした後 (19)」、「一人で夜ご飯を食べている時 (18)」など、一人で食事をしたりテレビを見たりする時の体験であり、「夜」(または夕食)という記述が多く見られるのが特徴的である。
- 32) 一人暮らし：「大学に入って、知らない土地で知り合いもおらず、一人暮らしを始めた時 (18)」、「初めて一人暮らしをして、学校にもまだ慣れず一人で過ごした日曜 (18)」、「一人暮らしをして、独り言が多くなった (19)」など、家族と離れ一人で暮らす体験であるが、まだ一人暮らしに慣れない頃の体験が多いようである。
- 33) クリスマスに一人：「クリスマス一人で過ごすこと (19)」、「クリスマスの夜、一人ぼっちだった時 (19)」、「クリスマスの日に見栄を張ってバイトを休んだ。予定もないのに (16)」など、クリスマスに一人だったり、予定がなかったりする体験である。

IX 金銭

- 34) お金にまつわるもの：「金がない時 (20)」、「親に嘘をついてまで、お金を貰った時 (15)」、「特に必要ないものを買った後 (18)」など、お金を持っていないとか、無駄使いをした後などという、お金に関係する体験である。

X その他

- 35) その他：「病院で精密検査を受けた時 (15)」、「夜勤のバイトをしていた頃 (20)」、「眠れない時 (19)」など、どのカテゴリーにも入らない体験を「その他」としてまとめた。

結 果

1. 空しい体験の分布

空しい体験の35カテゴリーごとの年齢別頻度を表4-1に示す。

1) 空しい体験の全体的な傾向

空しさを最も強く感じた体験は、小学校の中学年あたりから少しずつ見られる。15歳で6.4%と、最初のピークを迎えている。16～17歳の時点では10%程度まで増加し、18歳の時点で18.5%と急激に増加し、19歳では22.5%と全体のピークに達している。調査実施時の実年齢と思われる20歳の時点では15.3%に減少し、21歳では3.2%まで減少している。

2) 空しい体験のカテゴリーと回答者数

空しい体験の内容のカテゴリーは、「その他」を含めて35項目である。全体の年齢を通して回答者が多かったカテゴリーは順に、「努力が報われない」(6.6%)、「暇ですることなし」(6.3%)、「他者への失望」(5.9%)、「目標なし」(5.5%)、「人間関係での躓き」(5.0%)、「人に認められない」(4.8%)、「一人のとき」(4.6%)、「孤立感」(3.8%)、「お金にまつわるもの」(3.8%)、「失恋」(3.4%)の10項目である。これらカテゴリーの回答者数の割合の合計は49.7%である。

次に、10の大分類ごとに回答者の割合をみると、「実存的問題」が14.7%、「自己」が15.8%、「漠然」が8.4%、「行為」が4.8%、「行為後」が8.6%、「喪失」が5.9%、「対人」が20.5%、「孤独」が14.3%、「金銭」が3.2%、「その他」が3.8%であった。

3) 空しい体験の年代別の傾向

空しい体験の出現年齢を、7歳未満、7～12歳(小学生)、13～15歳(中学生)、16～18歳(高校生)、19歳以上(大学生)と、大きく5つの年代に区切り、体験内容のカテゴリーの数を比較した。それによると、7歳未満が3項目、7～12歳が19項目、13～15歳が27項目、16～18歳が34項目、19歳以上が34項目であった。空しい体験は年齢に伴って増加するとともに、体験する内容も年齢に伴って広がってくるのが分かる。

次に回答者数と回答カテゴリーの割合を見てみると、7歳未満は3名であり、「他者への失望」(33.3%)、「一人のとき」(33.3%)、「一人の食事やテレビ」(33.3%)である。

7～12歳は38名であり、「人間関係での躓き」(15.8%)、「人に認められない」(13.2%)、「行動の強制」(10.5%)という回答が多かった。

13～15歳は70名であり、「人間関係での躓き」(10.0%)、「受験勉強や授業」(8.6%)、「人生の意味」(5.7%)、「期待はずれ」(5.7%)、「失恋」(5.7%)という回答が多かった。

16～18歳は213名であり、「目標なし」(9.9%)、「努力が報われない」(9.9%)、「暇ですることなし」(5.6%)、「他者への失望」(5.6%)、「一人のとき」(5.2%)という回答が多かった。

19歳以上は236名であり、「暇ですることなし」(8.9%)、「他者への失望」(6.8%)、「一人のとき」(5.9%)、「お金にまつわるもの」(5.9%)、「努力が報われない」(4.7%)、「孤立感」(4.7%)という回答が多かった。

表4-1 空しい体験の年齢別頻度

	No	カテゴリー	年齢	5	6	小計	%	7	8	9	10	11	12	小計	%	13	14	15	小計	%	16	17	18	小計	%	19	20	21	22	23	24	25	小計	%	総計	%
実存	1	人生の意味				0	0.0						1	1	2.6	2	1	1	4	5.7	2	1		3	1.4	2	1						3	1.3	11	2.0
	2	自分とは何か				0	0.0							0	0.0				0	0.0	3	1	3	7	3.3	1		1					2	0.8	9	1.6
	3	目標なし				0	0.0						1	1	2.6		1	1	2	2.9	4	4	13	21	9.9	4	3						7	3.0	31	5.5
	4	変化のない生活				0	0.0							0	0.0		1	1	2	2.9	2		2	4	1.9	5	4						9	3.8	15	2.7
	5	夢中になれない				0	0.0		1		1		1	3	7.9			2	2	2.9	1	2	3	6	2.8	2		3					5	2.1	16	2.9
自己	6	挫折感				0	0.0							0	0.0		1	1	2	2.9	3	1	3	7	3.3	3							3	1.3	12	2.1
	7	無力感				0	0.0				1			1	2.6			3	3	4.3	1	1	1	3	1.4	5	4	1					10	4.2	17	3.0
	8	努力が報われない				0	0.0	1					1	2	5.3	2		1	3	4.3	4	9	8	21	9.9	3	6	1				1	11	4.7	37	6.6
	9	劣っている自分				0	0.0					1		1	2.6	1	1	1	3	4.3		1	2	3	1.4	2	2	1					5	2.1	12	2.1
	10	何もしない自堕落な自分				0	0.0							0	0.0	1			1	1.4	1		3	4	1.9	3	3						6	2.5	11	2.0
漠然	11	暇ですることなし				0	0.0							0	0.0		1	1	2	2.9	3	3	6	12	5.6	11	9		1				21	8.9	35	6.3
	12	なんとなく				0	0.0					1		1	2.6	1		1	2	2.9	1	2		3	1.4		5	1					6	2.5	12	2.1
行為	13	受験勉強や授業				0	0.0						1	1	2.6		3	3	6	8.6		3	5	8	3.8	2							2	0.8	17	3.0
	14	行動の強制				0	0.0			1	1	2		4	10.5	2	1		3	4.3			1	1	0.5		1			1			2	0.8	10	1.8
行為後	15	卒業式・部活の引退				0	0.0							0	0.0			1	1	1.4		1	4	5	2.3								0	0.0	6	1.1
	16	過食した後				0	0.0							0	0.0				0	0.0			2	2	0.9	2	1						3	1.3	5	0.9
	17	ゲームの後				0	0.0							0	0.0			1	1	1.4	1	1		2	0.9	1	3						4	1.7	7	1.3
	18	楽しみの終了時				0	0.0	1						1	2.6		3		3	4.3	1	2	1	4	1.9	2	1	1					4	1.7	12	2.1
	19	期待はずれ				0	0.0	1				1		1	3	7.9	1		3	4	5.7	1	2		3	1.4	5	3					8	3.4	18	3.2
喪失	20	大切なものを奪われる				0	0.0			1		1		2	5.3				0	0.0				0	0.0		2						2	0.8	4	0.7
	21	人の死				0	0.0							0	0.0		1		1	1.4	1	1	2	4	1.9	5							5	2.1	10	1.8
	22	失恋				0	0.0						1	1	2.6	2		2	4	5.7		5	1	6	2.8	6	2						8	3.4	19	3.4
対人	23	恋人なし				0	0.0							0	0.0				0	0.0	1		2	3	1.4	4	1	2					7	3.0	10	1.8
	24	人に認められない				0	0.0		1		3		1	5	13.2		1	1	2	2.9	2	3	5	10	4.7	1	7	2					10	4.2	27	4.8
	25	他者への失望	1		1	33.3						1		1	2.6	2		1	3	4.3	5	4	3	12	5.6	10	5	1					16	6.8	33	5.9
	26	人間関係での躓き				0	0.0				1	1	1	3	6	15.8	2	1	4	7	10.0	4	1	3	8	3.8	5	2					7	3.0	28	5.0
	27	自分の気持ちを表現できない				0	0.0							0	0.0				0	0.0		1	1	2	0.9	2	1						3	1.3	5	0.9
	28	人とつながらない				0	0.0		1					1	2.6			1	1	1.4	1	1	3	5	2.3	4	1						5	2.1	12	2.1
孤独	29	孤立感				0	0.0					2	2	5.3		1	2	3	4.3	3	1	2	6	2.8	5	4	1						10	4.2	21	3.8
	30	一人のとき		1	1	33.3								0	0.0				0	0.0	3		8	11	5.2	7	5	1			1		14	5.9	26	4.6
	31	一人の食事やテレビ		1	1	33.3						1		1	2.6	1			1	1.4	1	1	4	6	2.8	4							4	1.7	13	2.3
	32	一人暮らし				0	0.0							0	0.0				0	0.0			8	8	3.8	5							5	2.1	13	2.3
	33	クリスマスに一人				0	0.0							0	0.0				0	0.0	2	2	1	5	2.3	2							2	0.8	7	1.3
金銭	34	お金にまつわるもの				0	0.0							0	0.0			2	2	2.9		1	1	2	0.9	7	6	1					14	5.9	18	3.2
その他	35	その他				0	0.0							0	0.0			2	2	2.9		3	3	6	2.8	6	4	1	1	1			13	5.5	21	3.8
	総計			1	2	3	100	3	3	3	9	8	12	38	100	17	17	36	70	100	51	58	104	213	100	126	86	18	2	2	1	1	236	100	560	100
	%					0.5								6.8				12.5					38.0									42.1		100		

考 察

1. 空しい体験の年代別の傾向

空しい体験の年代別の傾向をみると、小学生時代の空しさの体験には、喧嘩やいじめなどによる「人間関係での躓き」や、頑張ったのに誰にも誉めて貰えなかったとか、親や先生に認めてもらえなかったといった「人に認められない」ことや、有無を言わずさせられる「行動の強制」などが大きな影響力をもっていることが分かる。つまり、小学生の空しい体験は、自分より力の強い他者からの影響を強く受けているといえよう。

中学生になっても、やはり「人間関係での躓き」は空しい体験の最大の要因ではあるが、「人生の意味」や「失恋」など青年期初期の特有の問題も大きくなるようである。また、高校受験に際して空しさを体験することも多いようである。

高校生になると、将来への目標がはっきり持てないことや、一生懸命に努力していることが報われないことに空しさを感じるようである。また、クラブ活動を引退してしまったり、受験が早く終わってしまったりした場合に、「暇することなし」という状況に陥ることが空しい体験に繋がるようである。そして、この時期の特徴として、「一人のとき」に空しい体験をすることがあげられる。

大学生と高校生とでは、「暇することなし」、「他者への失望」、「一人のとき」、「努力が報われない」という4項目の割合の高いことが共通している。「他者への失望」は、高校、大学と自分自身の世界が広がるのに伴い、交友関係も広がっていく中で友人に裏切られたり、人が信じられなかったりといった体験をするようになるのではないだろうか。また、「お金にまつわるもの」が多くなっているのは、大学生になって実家を離れ一人暮らしを始めて、お金のないことが切実な体験となることと関係していると思われる。

2. 空しい体験の構成要因

本研究の調査結果から、空しさは、①「人生の意味」などに代表されるような「実存的な問題」に対峙した場合、②「こうありたい」と願う理想の「自己」とかけ離れた現実の「自己」に対する不安全感や失望を抱いた場合、③「なんとなく空しい」というように「漠然」としている場合、④「受験勉強や授業」など「行為」そのものに対して感じる場合、⑤何かを成し遂げた後や「楽しみの終了時」などいわば「祭りの後」的な「行為後」と、してしまったことに後悔を伴うような「行為後」とに感じる場合、⑥「失恋」など大切なものを「喪失」した場合、⑦「対人関係」がうまくいかない場合、⑧「孤独」だと感じる場合、⑨「金銭」的な問題が生じた場合に、体験する感情のようである。

空しさを最も感じるのは、「対人関係」がうまくいかない場合（20.5％）である。「失恋」（3.4％）もこれに含めることができるかもしれない。また、対人関係のうまくいかなさが、その対局にある「孤独」（14.3％）を意識させることにもなるのであろう。

次に空しさを感じるのは、「自己」に対する不安全感である（15.8％）。「人生の意味」や「自分とは何か」などを問う「実存的問題」（14.7％）も「自己」に向けられた問いである。

「失恋」を含めた「対人関係」や「孤独」（合計38.2％）は、いわば他者を求める気持ちの不安全感である。一方、「実存的問題」や「自己」（合計30.5％）は、自分自身への不安全感である。調査対象者の体験は青年期までに限られ、そして空しさの体験年齢は青年期に集中している。

アイデンティティの確立期にあたる青年期は、「自己」と「他者」をより強く意識する時期でもある。「自己」にも「他者」にも厳しい目を向ける時期であり、その理想と現実の狭間で不全感を抱くことが多いのではないだろうか。そのことが、70%近くの回答者が「空しい」と強く感じる体験に繋がっているものと考えられる。

参考文献

Plutchik,R., The multifactor-analytic theory of emotion, Journal of Psychology, 50, 153-171,1960

上杉喬 感情イメージの研究 人間科学研究 第3号 22-38 1981

上杉喬 感情イメージの研究(Ⅱ)―労働場面における感情イメージ― 人間科学研究 第4号別冊 29-40 1983

上杉喬 感情イメージの研究(Ⅲ)―労働場面における感情イメージの諸連関― 人間科学研究 第5号 11-20 1984

上杉喬 感情イメージの研究(Ⅳ)―対象による違いと性による違い― 人間科学研究 第11号 1-11 1989

上杉喬 感情イメージの研究(Ⅴ)―SD法による感情イメージの検討― 人間科学研究 第20号 68-77 1998

上杉喬・鈴木賢男 感情イメージの研究(Ⅵ)―感情価とパーソナリティ特性との関連― 生活科学研究 第22号 121-132 2000

上杉喬・榎場真知子・馬場史津 感情体験の分析 ―嫉妬・憎い・怒りについて― 生活科学研究 第24号 25-40 2002

鈴木賢男・鈴木国威・上杉喬 感情体験の分析(Ⅱ)―喜び・悲しいについて― 言語と文化 第15号 2003

高木秀明 心理学辞典 有斐閣 501-502 1999

田島信元 心理学辞典 有斐閣 5-6 1999

矢野喜夫 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房 570-571 1995